

牧之原東照宮と幟の寄贈について(報告)

【牧之原東照宮関連資料】

まず、当課(博物館)で把握している牧之原東照宮関係の資料ですが、5点ほど把握しております。その内2点(流)は、今回大草家から寄贈された島田市指定文化財になっている幟資料です(添付資料1『島田の文化財』冊子掲載)。

その他3点は、いずれも平成16年に島田市博物館で実施された企画展「蓬莱橋と牧之原開拓史」の際に借用して展示、公開している資料です(添付資料3:図録掲載番号47~49)。

- ①・② 牧之原東照宮の幟: 牧之原東照宮勸請15周年に当たる1893(明治26)年に、牧之原東照宮のために勝海舟と榎本武揚が自筆で奉納した幟です。旧幕臣たちとの係わりを示す格好な資料として、1970(昭和45)年に市指定文化財に指定されています。現在は、島田市博物館の所蔵となっています。
- ③ 家康像(木像: 高さ34.0×幅16.0 cm・図録掲載番号47) : 当初は、牧之原東照宮で保管、その後、新次郎の菩提寺である法林寺の住職が保管していましたが、現在の所蔵は「下田開国博物館」です。*当時は御神体として伝えられていました。
- ④ 牧之原東照宮瓦片(鬼瓦・図録掲載番号48): 牧之原東照宮の瓦と伝えられています。島田市博物館所蔵です。
- ⑤ 牧之原東照宮神記(図録掲載番号49): 牧之原東照宮建設の経緯と家康像の遷座経緯が記されています。牧之原東照宮で保管、その後、新次郎の菩提寺である法林寺の住職が保管していましたが、現在の所蔵は「下田開国博物館」です。

【牧之原東照宮遷座等の経緯について】

牧之原東照宮遷座及び家康の木像(御神体)については、上記『牧之原東照宮神記』や樋口雄彦「第4章6紅葉山神像の遷座とその後」『久能山誌』静岡市(平成28年発行)に詳しく記述があり、以下これらの資料をもとに説明します。

「牧之原東照宮の御神体である家康像は、1618(元和4)年3月、2代将軍秀忠が江戸城紅葉山に社殿を創健し鎮座しました。1868(明治元)年、江戸城開城の際、上野の寛永寺に遷されましたが、彰義隊の戦が発生したため、山岡鉄舟が一時、小石川の酒井安房守邸に移し、その後1870(明治3)年に久能山に遷座しました。その後、旧幕臣たちが牧之原に入植したことをきっかけに、1877(明治10)年には、久能山にあった東照宮を旧幕臣の氏神として牧之原に勸請した際、御神体として遷座されました。」これには、牧之原開墾という苦しい事業の中で、開墾方の精神的な支えとして人心の安定を図り、土地に定着させようとした中條、大草の計らいがあり、社は谷口原のほぼ中央、中條屋敷の西側に遷座しました。

さて、その後家康像の行方については、『久能山誌』「紅葉山神像の遷座とその後」によ

ると明治期には、確かに牧之原東照宮に遷座されたことは、その文中、久能山東照宮所蔵の資料(『久能山誌』文中引用資料)からも明らかです。その後 1917(大正 6)年になると、東京千駄ヶ谷にある家達邸が新築され、その庭の一角に東照宮を新たに建て、牧之原東照宮から家康像を遷座したことが記載されています(遷座式・大正 7 年)。毎年 9 月 17 日に祭典が開催され、一門・旧臣たちに参拝が許され、園遊会も開かれているようです。この祭典は、家達が亡くなる 1940(昭和 40)年まで続いたようですが、その後太平洋戦争が始まり戦後の混乱のなかで、御神体の行方はわからなくなったようです。

また、『久能山誌』によると、家康像の御神体は、等身大だったとされていますので、先に紹介した家康像は、高さ 34.0×幅 16.0 cm 程のもので、等身大とは違い小規模の像で、造りも粗雑なものです。このことから、現存する家康像は、江戸城にあった御神体ではなく、御神体が家達邸に移った後、旧幕臣がその代わりとして、彫ったものではないかとも推測されます。

その後の牧之原東照宮の遷座経緯は、1966(昭和 41)年に東照宮の敷地が老人ホームとなり解体され、大草(高重)家地元の岡田地区八幡神社に合祀された後、1969(昭和 44)年には静岡カントリー島田ゴルフコース内に再度分霊し創祀されています(添付資料 2)。